



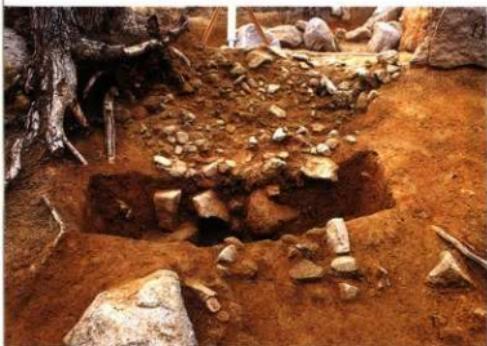
C地区 配石溝段差部検出状況（東から）

第17・19地点周には、高さ2m以上の段差があり、この斜面を精査中に、角礫を多數詰めた暗渠がみつかった。ベースを切り込み、小石材を配する溝の断面を検出したようす。右上にはAタイプの矢穴をもつ石がみえる（117号石材）。



C地区 配石溝および平坦面検出状況（西から）

溝状遺構が検出されたため、第17調査地点の①トレンチを拡張し、配石溝の方向と規模を調べた。溝内の角礫は、西にいくと減少し、深さも少し浅くなるようだ。この面からは、サヌカイト洞片なども検出された。第108・109図参照。



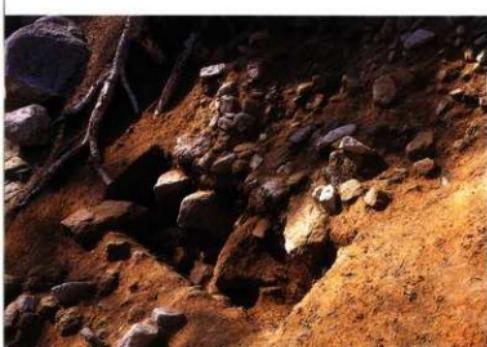
C地区 配石溝サブトレンチ②断面確認状況（東から）

この溝は、幅80～130cm、深さ約30cmで、下部には20～30cmの角礫を、上部には5～10cm大的角礫や円礫を配していた。流水痕跡は顕著ではないが、排水溝とみられる。



C地区 配石溝サブトレンチ①断面確認状況（西から）

溝の方向は、東方の段丘縁急斜面の方向を向いており、水を集めて台地の末端に流している。用途については、当初、横穴式石室壇の排水施設と考えられた。掘り広げた結果、耕作地に伴う溝と判断。



C地区 配石溝テストトレンチ②確認状況（北から）

第17地点①トレンチの北側から断ち削り状況を撮影（第109図）。



C地区 配石溝の断面（西から）

溝内からは、年代決定と係わる遺物は出土しなかった（テストトレンチ①）。



C - II B 区 土坑・焼土坑群検出状態（北から）

本発掘調査で広げたこの調査区からは、石切丁場関係の遺構は見い出されなかったが、火を用いた形跡のある遺構群が数多く検出された。遺構の検出された面は、江戸時代に通ってもよいものであった。



C - II B 区 土坑・焼土坑群検出状態（東から）

この遺構群の周辺には低石垣を伴い、石切丁場と関係した施設が存在したようである。全面調査したが、時期を特定し得る遺物は検出されなかった。C - I A 区の知状遺構とも関係する。



C - II B 区 土坑・焼土坑群発掘状態（東から）

10基弱の土坑同士に重複したものはみられず、概ね同じ時期に機能しているかに見える。中には径 100 cm を超える土坑もみられるが、径 30 ~ 80 cm の椭円形プランの土坑が多かった。



C - II B 区 焼土・炭化物検出状態（東から）

全掘すると、焼土や灰壙塊、炭化物などが出土したが、壁そのもののやベースは被熱しておらず、他所から持ち運ばれてきたような状況と考えられた。



C - II B 区 焼土・炭化物検出状態（東から）

炭化物の中には、炭化材の断片も含まれていた。第 95 図参照。



C - II B 区 西壁土層断面（北東から）

これらの土坑群は、耕土下数 10 cm ~ 1 m のところに眠っていた。



C - I A 区 本発掘調査区での鍛冶炉  
状遺構の検出状況（西から）

C 地区第 16 地点⑤トレンチの壁面で焼壁  
や炭化物が顕著に認められたため、部分拡張してみた。かなり損傷が著しいが、炉状  
の遺構と判断された。岩ヶ平刻印群北方の  
肥前唐津藩寺澤志摩守広高の石切丁場では、  
覆屋を施した鍛冶炉跡が 3 基もみつかり、  
周辺でフイゴの羽目や鍛冶津や精錬津、鍛  
造剝片などが出土しているし、最近、市内  
六箇荘町でも、江戸時代初期の唐津焼を伴  
う炉壁の集中部などが確認され、類例は増  
加しつつある。深さ 1.2m 程のところから  
出てきた遺構である（第 93 図）。



C - I A 区 出土炉状遺構平面  
(上から)

ライン内側のベース土はきわめて淡い  
ながら、赤色変化をみせており、その範  
囲内に炉壁が崩れてブロック状になって  
出土した。焼土や炭化物なども伴出した  
が、機能を特定づける遺物や年代根拠と  
なる資料には、恵まれなかった。



C - I A 区 出土炉状遺構断面  
(西から)

焼土・炭化物・炉壁が崩れた状況で集  
中する部分の厚さは 13 ~ 16 cm を測る。  
周囲にはなおこうした火化施設がいくつ  
か存在する可能性は残る。



A地区第11地点①トレンチ採石土坑検出状況（南西から）  
巨石の周囲は要注意だ。採石の前提となる穴を掘ることが多いからだ。色調では判りづらいが、土質が異なるため、比較的容易に土坑の肩ラインを引くことができる。検出段階に撮影したもの。石に矢穴はあるのか。



A地区第11地点①トレンチ採石土坑掘削状況（南西から）  
往3m弱ぐらいの土坑がトレンチにかかるて出てきたが、この巨石にはとくに加工痕はなかった。土坑からは遺物の出土はないものの、層位的には江戸時代初期の遺構と考えている。第91図参照。



A地区第11地点①トレンチ採石土坑掘削状況（南東から）  
採石土坑の目的は、巨石の厚さをみるものが多い。この土坑も石の下にかかる近くまで掘っていた。この巨石は表土直下にあるが、元和～寛永期には十分頭が見えていただろう。石の全容を見て、不適とみたようだ。



A地区第11地点①トレンチ採石土坑土層断面（南西から）  
土坑内部には掘り掻げた土が、再び流入していた。岩ヶ平刻印群では、これまでこうした採石目的の土坑は20箇所で確認されており、当時の採石技術の一端が知られよう。第92図参照。



A地区谷1 76・77号石材検出状況と周辺のコッパ群  
江戸時代初期の石切丁場の作業面の一つ。右手にはコッパの集積が認められる。常々コッパは1箇所に集められたようである。



A地区第8地点②トレンチ44号石材検出状況  
谷1上方の石曳き道近くのアトリエで検出。小丁場の一つがあつたのだろう。44号石材は薄く、裏側は自然面で端石とみてよい。



A地区第1地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（北西から）

谷1の左岸上方一帯の平坦地で、尾根状の突出があり、古墳の存在が予想された。樹木伐裁時の重機進入路になっていたが、水平に広がる耕作土以下の洪積層は良好に遺存していた。



A地区第1地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（北西から）

機械掘削の状況。伏流水が豊かで斜面側の水みちの一つになっており、湧水とともに、カエルやサワガニがたくさん顔を出した。本地点は、非古墳と判断した。



A地区第6地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（南から）

B地区の境界付近近くの台地面に設定して、古墳などの確認に努めた。盛土直下に段丘疊層の広がりを認めた。左手は造成土が大量に搬入されている。



A地区第2地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（西から）

谷1の右岸部尾根の上頂面に設定した。表土直下に段丘疊層の広がりが確認され、採石土坑らしき穴1基がみつかったが、古墳の兆候はなくなつた。



A地区第6地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（東から）

トレンチ内部のようす。段丘疊層は二次的であり、花崗岩は小さく。中央奥の壁面には厚い盛土が確認された。



B地区第3地点①トレンチ古墳状隆起確認調査（北から）

古墳はみられなかったが、大阪層群と段丘疊層の不整合面がわかりやすく観察できた。この付近では、石切丁場はなかった。



第16地点①トレンチ・⑤トレンチ（北から）  
手前の⑤トレンチ耕作土直下よりサスカイト製の打製石鎌が出土した。



第16地点⑥トレンチ（南から）  
石垣6で区切られた中段耕作面に設定した。トレンチ掘削の風景。



第16地点⑦トレンチ  
(東から)  
耕作地盤差にトレンチ  
の一部をかけて設定した。  
西へ下る落込みを確認し  
た。



第19地点②トレンチ  
(西から)  
耕作土直下より20～  
60cmの自然縞が出土し  
た。深掘部分。



第15地点③トレンチ（西から）  
C地区平坦面の形成時期・過程の確認トレンチ。石材の出土はない。



第19地点②トレンチ（東から）  
崩壊しているものの、人為的に積まれた石垣が顔を出した。



C-I-A区（第16地点①・⑤トレンチ）全景（北東から）  
トレンチ中央以西に縞が密集する。地形の変化するようすを把握。



第19地点④トレンチ（南東から）  
東に傾斜する旧地表面に幾層もの盛り土を重ね平坦面を構築して  
いることがわかった。



C地区 I B本調査区遠景（東から）  
近世以降の土坑（手前）、142号石材（中央右よりの巨石）。



142号石材原位置確認サブトレーニング（東から）  
ベースとなっている土の性格や年代を究明するため、設定。



C地区 I B区調査風景（南から）  
刻印石の探査作業や割石材の計測調査など。夕刻の追い込み作業。



142号石材基底小トレーニング実測風景  
刻印石の流石時期を調べているようす。転石の年代は古い。



142号石材全形確認状況（北から）  
石の周囲を掘り進めると、大きな刻印石は全容を現した。



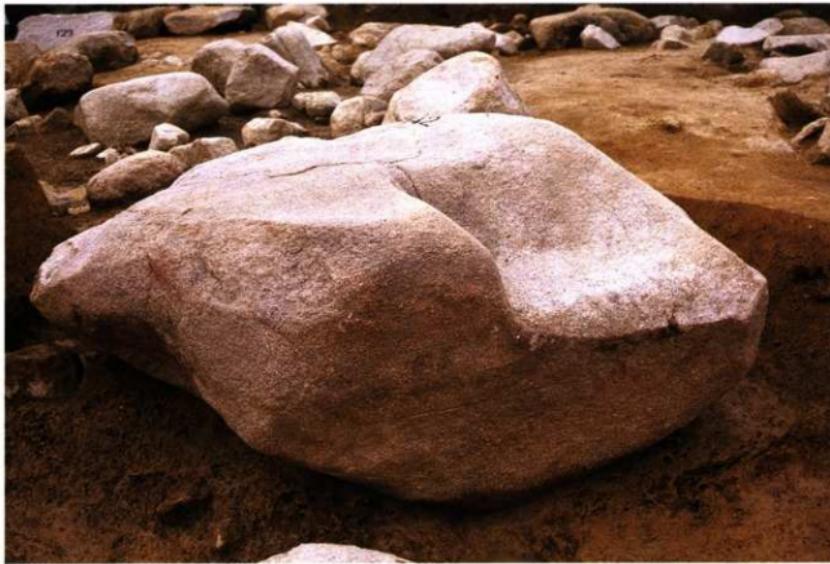
第17地点①トレーニング 116号石材刻印面  
裏に返して、印種を判読する。自然面にある。チョーク部分。



146号石材刻印面とCタイプの矢穴痕  
「分削」か、「斧」か、この刻印石は新しい採石で削られたようである。

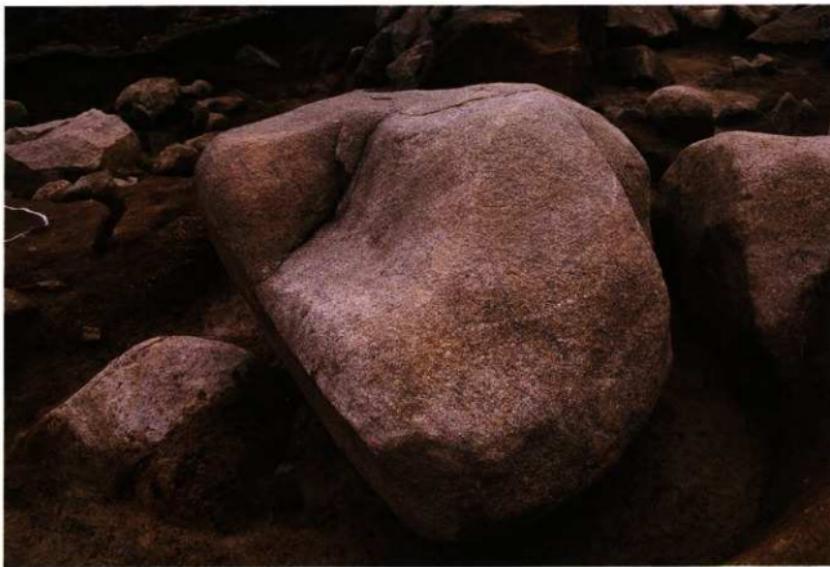


147号石材刻印面  
調査最終日にみつかった刻印。これも断材となっていた。



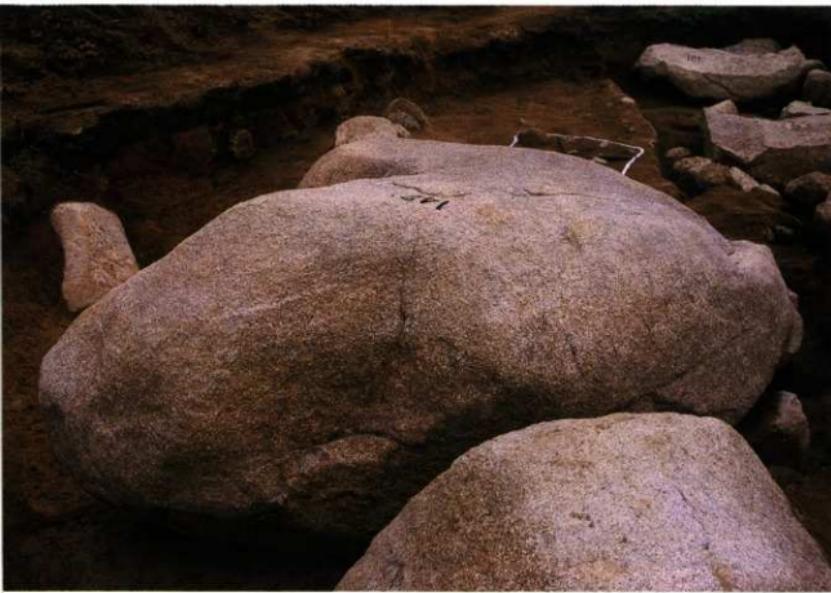
C 地区 本調査 C - I B 区 142 号石材（刻印石）検出状態（東から）

中・下段耕作面段差に残していた幅約 1m の畦の中から上面部が確認された。南北長軸 3.15m、東西短軸 1.92m を測る亀形を呈する巨石。第 84・85 図、第 140 図参照。作業空間の境となる場所での発見。



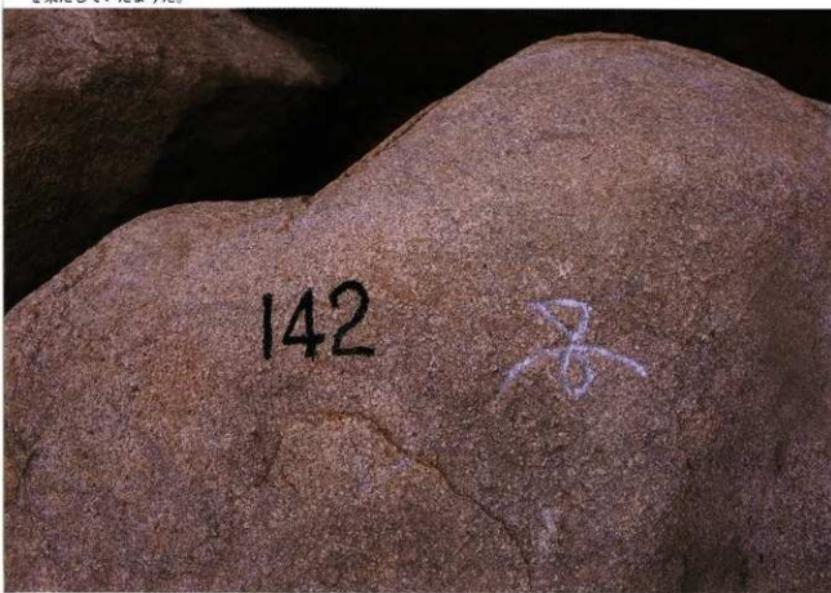
C 地区 本調査 C - I B 区 142 号石材（刻印石）検出状態（北から）

周囲に採石のための土坑ではなく、自然石の状態で原位置を保っている刻印石である。割石としての対象ではなく、装饰的機能が重視されたと考えられる。岩ヶ平刻印群の刻印石には、自然石のもののが多數みられる。



C 地区 本調査 C - I B 区 142 号石材〔刻印石〕(西から)

刻印石は單独で出土し、周囲には作業痕跡もその他の加工石材も見当らなかった。しかし、石切丁場では重要な役割を果たしていたようだ。



C 地区 本調査 C - I B 区 142 号石材〔刻印石〕(南から)

巨大な自然石の上面部分に、通称「巳」の刻印が明瞭に彫られていた。第 84・85・140・143 図参照。



C 地区 本調査 C - I B 区 割石群 [129 ~ 131 号石材] (南東から)

この調査区の南側より 3 分の 1 の区域では、多数の矢穴痕をもつ割石が群在した。129・130 号石材は同一石材が分割されたもの。第 78 図参照。奥は I A 区との間に介在する石垣。



C 地区 本調査 C - I B 区 割石群 [104・128・134 号石材付近] (南西から)

これらの群在する割石のベースは下降して、谷の埋積をなしている。この谷に向けて、大型の丁場があったと考えられる。



C 地区本調査 C - I B 区 西半域全景（南西から）  
手前に削石群がみつかり、奥側は段丘面上に自然石の群れを検出。



C 地区本調査 C - I B 区 全景（南東から）  
手前は自然石の一群、奥側には谷地形があり、多数の削石を確認。



C 地区本調査 C - I B 区 全景（北東から）  
削石と自然石が地形の変化部分で境界をつくって見い出された。



C 地区本調査 C - I B 区 南半域近景（東から）  
第 16 調査地点③トレンチ拡張部分で、耕作に伴う石剝がみられた。



C 地区本調査 C - I B 区 142 号石材〔刻印石〕（東から）  
水田段差部分で確認された巨大な自然石。他の石と対照的存在。



C 地区本調査 C - I B 区 142 号石材〔刻印石〕東西面拡大  
自然石に刻線を思わせる亀裂が入っていた。幅 2 ~ 3 mm。



C 地区本調査 C - I B 区 142 号石材〔刻印石〕（北東から）  
刻印の第 1 発見者は女性補助員で、石材登録番号を溝肩に付ける。



C 地区本調査 C - I B 区 142 号石材探拓状況（南から）  
92 号石材とはやや趣きを異にする「雁」の刻印。調査地 2 例目。